アジア・アフリカ地域研究 第16-1号　2016年11月
Asian and African Area Studies, 16 (1): 100-119, 2016

フィールドワーク便り

安定化の進む国境地帯（続編）

──進むカレン系武装勢力の協調関係──

佐々木　　研*

2015年10月下旬に，久しぶりにミャンマー連邦カレン州東部を訪問した．今回は，国境の町であるミャワディを拠点とし，大学院時代に調査対象とした村落などを短時間ではあったが周ることが出来た．ミャワディ北部に位置するココ村はシュエ・ココ村と名を変え，以前訪問した時にはまだ計画中だった小さな商店が軒を並べる商店街もカジノもすでに営業していた．2008年に同村を訪問した際には民主カレン仏教徒軍（DKBA: Democratic Karen Buddhist Army）の第999特殊大隊の本拠地であったが，この大隊も含め大部分のDKBA部隊が現在では国境警備隊（BGF: Border Guard Force）に改編している．BGFは，国軍の指揮下にあり正規軍として位置づけられているため，カレン系武装勢力のなかでは唯一市街地内での武装が認められている．カレン州のBGFは4つのグループから構成されており，全グループで13個の大隊が存在する．第2，第3グループの主なメンバーは第999特殊大隊出身者であり，第1グループは他の旅団出身者，第4グループは他の旅団出身者に加えカレン人民軍（KPF: Karen People's Force）出身者らにより構成されている．第3グループは，カレン州内のBGFのなかでは最大の勢力を有しており，シュエ・ココ村は現在この第3グループの本拠地となっている．

村には，BGF第2，3グループを事実上指揮する元第999特殊大隊長が経営する建設会社がある．この会社は，ミャワディからシュエ・ココ村を通り，国境沿いのメタワから西にはいってドーナ山脈の西に位置するミャインジングーに至る道路の拡幅・舗装工事をしているが，完成はまだ先になるとのこと．また，BGFは前回の訪問時と同様に農畜産物を生産してはタイ側に輸出したり，通関税を徴収したりしている．DKBAから正規軍であるBGFに改編し，各大隊には国軍の将校と下士官も所属しているとはいえ，上層部は第999特殊大隊と一部重複しており，組織としての独立性や経済活動の自由度はある程度維持されているようである．

ところで，現在のカレン州には国軍の指揮下にあるBGFとタンダウン特別国民軍（TSPA: Thandaung Special Public Army）の他，

*（株）サイエンスクラフト

独立性を保っているカレン民族同盟（KNU: Karen National Union），カレン民族同盟／解放戦線和平協議会（KPC: Karen National Union/Karen National Liberation Army-Peace Council），民主カレン慈善軍（DKBA: Democratic Karen Benevolent Army），民主カレン仏教徒軍（DKBA: Democratic Karen Buddhist Army）といったそれなりの勢力を保有する6つの勢力に加え，小規模な独立したカレン系武装勢力が混在している．ここでは，分裂の過程を詳細に説明することはやめておくが，元を辿れば90年代中旬以降に，KNUから分裂や統合を繰り返して現在の混在した状況に至っている．私が訪問した地域であるドーナ山脈の東部，ミャワディより北のメプレー川水系で主に活動しているのは，上述のうちBGFの第3グループ，KNUの第7旅団と司令部直轄の第101特殊大隊，KPCの3勢力である．

この地域はKNUでいえばもともと第7旅団管区に含まれており，旅団本部が置かれている国境沿いのラキーラ（あるいはレイワとも呼ばれる）では，全国から少数民族組織の代表が集まっては政府との和平交渉に向けた議論が交わされている．この地域で活動するKNUは建設会社を保有しており，前回の調査でお世話になった第101特殊大隊の大隊長が社長となっていた．この会社は，道路建設や旅行業の他に，難民などを受け入れるシェルターの建設も請け負っており，今回訪問したシュエ・ココ村南部のワンカー陣地跡やメプレー川沿いに遡ったT村でも，タイ側の難民キャンプから帰還する人々を受け入れるためのシェルター建設を計画中とのことであった．

KPCは，2007年に当時KNUの第7旅団長が部下の一部を率いて国軍側に帰順し，新たに設立した勢力である．KPCは現在，ドーナ山脈の西側の麓にあるコーカレイ郡のトココー村（最近，ナウタヤー村と名を変えたらしい）に本部を置いている．風光明媚な景色の良いところだが，KNU初代議長のソウ・バ・ウジー（Saw Ba Ugy）が最後に潜伏していた地でもある．また，KNUがそれなりの勢力を誇っていた80年代後半から90年代初めまで，ラングーン（現ヤンゴン）等からKNUへ参加を希望するものは，ほとんどがこの村を通過しドーナ山脈を越えKNUへの合流を目指したという．KNUにとってはある意味象徴的な場所ともいえる．ラングーンに住んでいたあるカレン人は，1988年にKNUへの参加を目指して僧侶たちとともにこの村を経由してドーナ山脈を登ったとのこと．ただ，山頂付近で国軍とKNUが激しい戦闘を行なっているのを見て怖くなり皆で引き返したという．

ミャワディからT村を経由し院生時代に訪問したP村へ移動する際，何度かBGFの立派な駐屯地前を通過するが，その経路上でしょっちゅうKPCの車とすれ違った．また，T村にはKPCが建設した小学校，診療所もある（写真1）．T村が位置するのは，BGF第3グループがDKBAから改編する以前から支配していた地域内であり，現在も同グループの支配下にある．また，このグループの本拠地であるシュエ・ココ村の間近にあるワン

写真 1　T 村の学校

写真 2　ワンカー陣地跡の畑地

カー陣地跡は現在では牛の放牧地，ベイッ（豆），タピオカ畑となっている（写真 2）．

かつて KNU の第 101 特殊大隊が駐屯していたワンカー陣地跡の土地の多くは，今では BGF 第 3 グループの将校が保有者となっているが，KNU がこの地にシェルターを建設することについては BGF と KNU によりすでに合意がされているようである．

2015 年 10 月には政府と 7 つの少数民族武装勢力および全ビルマ学生民主戦線が全国規模停戦合意に署名した．KNU と KPC，DKBA のひとつ（Benevolent の方）も署名に参加している．KNU 内には和平過程に慎重な姿勢を示す勢力も存在するが，第 7 旅団と第 101 特殊大隊は和平推進派である．つまり，メプレー川水系で活動しているカレン系武装勢力は，正規軍化した BGF を含めすべて和平推進派であるといえる．これらの勢力は，今では互いに対立するよりも協調して地域内の開発を優先しているようである．また，和平に対する態度もさることながら，この地域で活動する各勢力のキーパーソンの全員が元々KNU 第 7 旅団出身であることも協調を促す要素になっているのかも知れない．12 月には村の郊外で，これまでで最大規模のカレン新年祭を開催する予定であり，打ち合わせのために KNU，DKBA（Benevolent の方），KPC の代表者がシュエ・ココ村に集まるとのこと．

郊外にはすでに広大な会場が用意されていた．また，BGF の建設会社が整備中である前述の道路はメタワも通過するが，ここには全国規模停戦合意の署名に参加せず，最近になっても国軍や BGF と時折，武力衝突している側の DKBA（Buddhist の方）の一部が駐留する場所である．こうしてみると，カレン系武装勢力は，時には対立しながらも，インフラ開発に関しては協調関係を進めているようにもみえる．それは，自らの勢力の政府に対する態度や独立性の維持を指向する一方で，社会情勢の安定化とインフラ整備などの開発促進によって，権益の確保と向上を指向するという各勢力の思惑が反映された結果生じている状況なのかも知れない．

ところで，院生時代に滞在したことのある

写真 3　P 村の景色

P 村を訪問したものの，農繁期であり村人はまばらだった（写真 3）．この時期は，皆夜中まで働いているというので，インタビューをあきらめて引き上げることにした．2008 年訪問時と同様に水田にはフィッシュトラップがあちこちに仕掛けられており，家畜が村内を歩きまわる風景もあまり変わっていなかった．ただ，当時とは異なり，村のすぐ際までゴムや豆，トウモロコシなどの換金作物の栽培を目的とした農場が広がっていた．社会情勢の安定化が進むのと同時に，生計を維持するうえでの周囲の自然環境への依存度はもしかしたら低下しつつある最中なのかも知れない．いろいろと興味の尽きない地域である．

引　用　文　献

佐々木研．2011.「安定化の進む国境地帯―ワンカー陣地からココ村へ」『アジア・アフリカ地域研究』10(2): 309-313.

現代トルコにおけるイスラーム学復興

―イスタンブルの教育ワクフ ISAR・EDEP の現場から―

山　本　直　輝 *

イスタンブルにおける「我々の文明の再興プロジェクト」

筆者は現代トルコのイスタンブルにおけるイスラーム学の復興について関心をもち，イスラーム教育を目的として設立された教育ワクフ（Eğitim Vakfı）を対象にフィールドワークを行なっている．「現代トルコ」と「イスラーム学の復興」という 2 つの言葉の組み合わせは，トルコの歴史に詳しい方は奇妙に聞こえるかもしれない．なぜならトルコ共和国建国に続く父ムスタファ・ケマル・アタトゥルクの一連の脱イスラーム化改革の一環として，オスマン帝国の悪しき遺産と考えられたスーフィー教団の活動拠点であるテッ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科